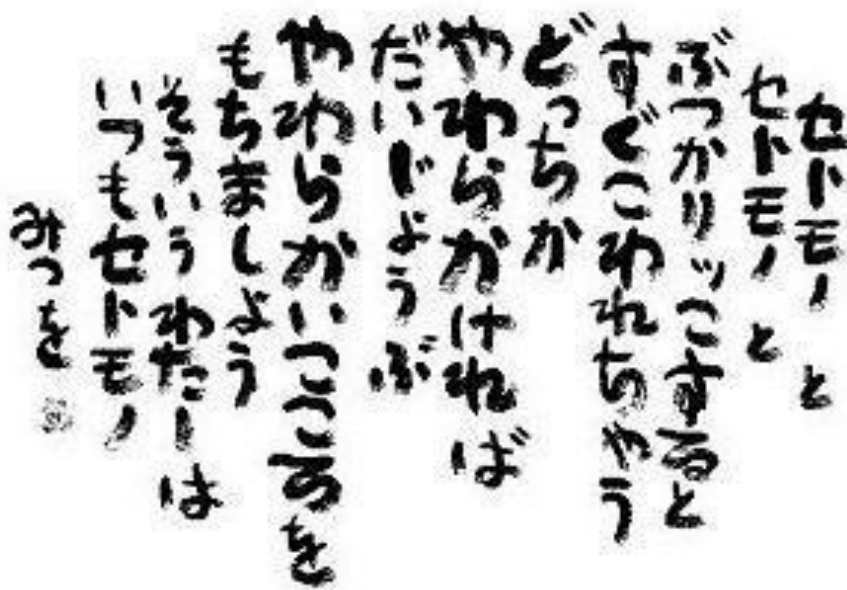


『Mind Charging』

第 52 回 発行：入試広報室 発行日：令和 2 年 6 月 8 日

相田みつをの名言



相田みつをさんについては、本人の写真や打ち込まれた文字よりも、彼の『書そのものが彼の顔』だと感じるほど特徴的で非常に印象に残ることから今回はこのようなレイアウトで紹介합니다。

この言葉は、以前テレビ CM に使われたこともある言葉で、初めてこの言葉を知った時に人の『正直な気持ち』がとても詰まった言葉に感じ、今も私が知っている数々の彼の言葉の中で最も印象に残っているものです。

私がこの言葉から人の正直な気持ちを感じたと述べましたが、正直とは一歩間違えると『エゴ』になることもあります。結論としては、間違えないためにも『やわらかい心』が必要だということでしょう。そこで、私はあえて“わざと”間違えて考えてみました。エゴたっぷりな感覚でこの書を読むと、『私はセトモノ感覚でしか生きられないからみなさんカバーよろしく』という感じに読み取れます。『どちらかが気を使えば成立するなら、あなたが気を使ってください』という考え方は、『ギブアンドテイク』という言葉があるように、自分だけ良ければいいという考え方は捨て、人の痛みや苦しみを『やわらかい心』で受け止めてあげられる思いやりを持って生きていきたいものですね。(編集委員：入試広報室 鈴木)

相田みつを(あいだみつを、本名：相田光男、雅号：食不安(ドンファン)、1924年5月20日 - 1991年12月17日)は、日本の詩人・書家。平易な詩を独特の書体で書いた作品で知られる。書の詩人、いのちの詩人とも称される。1924年、栃木県足利市に6兄弟の三男として生まれた。生家は名刹、饅阿寺(ばんなじ)の東に位置していた。旧制栃木県立足利中学校在学中に書や短歌、絵に親しんだが、喫煙の濡れ衣をきせられ軍事教練の教官に嫌われたために進学を断念。卒業後は歌人・山下陸奥に師事した。1942年、歌会で生涯の師となる曹洞宗高福寺の武井哲応と出会い、在家しながら禅を学んだ。1943年、書家を志して岩沢溪石に師事、本格的に書の修行を積んだ。1953年3月、関東短期大学卒業。